●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 15-2

第4回国際教育シンポジウム報告書

「家族の中の子どもたち」

目　次

はじめに …… 2

国際比較調査にみる世界の親子・家族 …… 3

〔第4回国際教育シンポジウム報告書〕 11

コーディネーター・パネリスト・ゲスト／プロフィール …… 12

Ⅰ．基調報告 …… 17

家族の中の子どもたち …… 18

●家族の状況 …… 20

●家族の中の子どもたち …… 22

●親子関係のあり方 …… 27

●性差との関連で …… 34

Ⅱ．各国パネリストからの報告＆ゲスト・コメント …… 41

1．パネリストからの報告 …… 42

●一人っ子政策と家族と子ども …… 42

●データにみる韓国の子どもたち …… 45

●家族の危機か、変化か …… 48

●子どもにとっての家族の役割 …… 51

●保護する家族と自立させる家族 …… 54

2．ゲスト・コメント …… 60

●地球村の相互文化理解に貢献 …… 60

●家庭にもカリキュラムを …… 61

●児童精神科医からみた家族 …… 63

Ⅲ．フリーディスカッション …… 65

家族の中の子どもたち …… 66

●相互依存に学ぶ …… 66

●依存と自立を2次元で考える …… 68

●男の子の技能の幅を広げる …… 70

●気になる日本の子どもの家庭志向 …… 71

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとは関係ありません。

はじめに

ベネッセ教育研究所
代表　島内行夫

よりグローバルな視点で日本の子どもを捉えるため1988年に始まった国際比較調査も今回で4回目を迎えました。

今回は、各国、各都市の子どもの目を通してそれぞれの地域の家族の姿や、子どもにとっての家族の意味を探り出すことを目的として上海、ソウル、ロンドン、ニューヨーク、東京の5都市で調査を実施いたしました。（調査結果はすでにvol.14－4「第4回国際比較調査」として発刊）

また、この調査結果をもとに、調査にご協力いただいた方々にお集まりいただき、第4回国際教育シンポジウム「家族の中の子どもたち」を1994年12月に開催いたしました。

シンポジウムではパネリストの方々から各国の教育事情や家族関係などについて報告していただくとともに、家族の中での子どものあり方について「依存」と「自立」という観点で大変興味深い討論が繰り広げられました。

前回同様、このシンポジウムの内容をぜひ多くの方々にお伝えいたしたく、『モノグラフ・小学生ナウ』という形で発刊することにいたしました。

各国の家族のあり方を理解していただくとともに、他の国々との比較を通して日本の子どもたちの現状を認識していただくご参考となれば幸いです。

第4回国際教育シンポジウム

会場：㈱ベネッセコーポレーション
　　東京支社13階（東京都多摩市）
日時：1994年12月2日（金）
　　午後1時～

国際比較調査にみる世界の親子・家族

―― 第３回国際比較調査の中から ――

静岡大学教授
深谷昌志

低調な国際家族年

1994年は国際家族年であった。国際家族年を契機として、欧米では家族をめぐって多くの論議がなされた。しかし、「心の時代」とか「家族への回帰」などがいわれているわりには、日本での国際家族年は盛り上がりに欠けたまま、閉幕したような印象を受ける。

日本でも家族が多くの問題を抱えていることは確かなように思う。少子化の進展、あるいは働く母親の増加、そして高齢化と親の看護などがその一例であろう。それでも、欧米と比較すれば、深刻さの割合が少ない。

これまで３回にわたって、国際比較調査を実施してきた。そうした中で、家族のあり方を考えさせられることが多かった。このレポートでは第４回の国際比較調査のシンポジウムでの話し合いの経過を紹介するが、その前に、これまでの調査(1)でどういう傾向が得られたのかを触れておくことにしたい。

(1) 「都市社会の子どもたち」，モノグラフ・小学生ナウ，vol. 12－4

朝食の風景

さまざまな社会を旅すると、さまざまな家族の姿に出会う。そうした姿を感覚的にとらえるだけではなく、１つの尺度を使って比較してみたいと、国際比較調査に乗り出してから10年以上の時間がすぎた。その結果、日本の家族や子どもをめぐる状況が悲観するほど悪いものではないと思う反面、気になる点も少なくないのに気がついた。

調査をしてみると、思わぬところに数値の開きが認められて、はっとさせられることがある。一例として、寝室を取り上げてみよう（表１）。東京の子どもたちが「親と寝ている」割合は23％で、子どもたちだけで寝ている形が定着してきたのがわかる。しかし、ストックホルムは２％、オークランド（ニュージーランド＝以下同）２％、サクラメント３％のように、西欧文化圏に住む子どもたちは親と完全に別室で寝ている。それに対し、アジア圏ではバンコク34％、ハルビン34％、ソウル32％のように、親と同室している子が少なくない。

もちろんアジアの場合、経済的な貧しさを背景にした居住環境の劣悪さが親との同室をもたらした一因であろう。しかし、それと同時に、アジアでは親子の関係が密着しているのに対し、西欧では分離しているところに親子関係の特徴が認められる。親との同室にそうした文化的な背景が存在しているように思

われてくる。

次に、表2に目を通してほしい。これは、朝食の様子を示しているが、ていねいに目を通すと、いくつかの傾向が浮かんでくるのがわかる。

バンコクやタイペイの「自分の家で食べる」割合が低いのは、東南アジアの多くの社会で朝食を屋台で食べる慣習があるのを示している。街角に屋台があって、豆乳や揚げパンを売っている。安い上においしいので、家の外で朝食をとる子が多いのである。

また、サクラメントでは欠食率が高い。親が離婚した、あるいは母親が働きに出て家を早く出たなどの理由で、朝食を家庭で食べられない子が少なくない。そのため、学校では「ブレックファースト・プログラム」という

表1　誰と寝ているか

(%)

	1人で	兄弟と	親と	その他
ストックホルム	(89.1)	7.9	1.7	1.3
サクラメント	(65.3)	29.4	3.3	2.0
オークランド	(60.7)	31.8	2.2	5.3
ハルビン	(60.0)	4.4	33.5	2.1
タイペイ	36.2	(47.7)	11.3	4.8
東　京	32.3	(37.8)	22.6	7.3
バンコク	24.3	(39.0)	33.6	3.1
ソウル	22.9	(41.7)	31.9	3.5

( ) は最大値

タイペイ、ソウルは第1回国際比較調査（1987～88年）、オークランド、バンコクは第2回国際比較調査（1989～90年）より＝以下同

名で給食サービスを始めたという。朝、学校を訪ねてみると、胸にシールをつけたたくさんの子が校門の前に集まっていた。朝食を食べる子らしい。やがて、校門が開き、係員がシールを確かめつつ子どもをカフェテラスに入れた。パンと牛乳、それに卵とソーセージくらいの簡単な朝食だったが、この学校では2割強の子がプログラムに参加していた。

「こうした子は朝と昼の食事を学校でとり、夕食は粗末な場合が多いと思う。だから、家庭が子どもを保護する機能を失っているのが問題で、給食は本当の意味で問題の解決にならない気がする。でも、現状ではこれしか方法がない」とは、担当者のコメントだった。

さらに、ストックホルムやオークランドでは、子どもだけで朝食をとる「孤食率」が高

表2　朝食の様子

(%)

	欠食率	孤食率	自分の家で食べた割合	給食その他
サクラメント	(12.6)	32.9	79.6	7.8
東　京	1.4	18.6	97.7	0.9
ハルビン	1.2	24.5	(98.2)	0.6
ストックホルム	5.3	34.3	94.2	0.5
オークランド	8.0	(38.6)	89.5	2.5
バンコク	3.5	36.8	84.2	12.3
タイペイ	1.7	18.2	84.6	(13.7)
ソウル	5.1	15.0	93.9	1.0

( )は最大値

い。西欧文化圏では朝食は牛乳にパン、それにチーズやコーンフレークス程度の簡単な場合が多い。夜はともかく、朝食はそれぞれがさっと食べていけばよいという感じらしい。

日本でも、朝ご飯を食べない子の存在が社会問題になることが多い。しかし、こうした調査データを手がかりにすると、日本の子の欠食率や孤食率が低いのがわかる。少なくとも、日本は自分の家で朝ご飯を食べてくる子が多い社会に属している。

もっとも、夕食になると「家族全員で食べる」割合が高いのが、サクラメントの77%、タイペイの74%など、多くの社会で6～7割が全員で夕食をとっている。それに対し、東京は父親の39%が不在なので、家族全員で夕食を食べる割合は41%にとどまる（表3）。

表3　夕食の様子

(%)

	孤食率	全員で	父親のみ不在
東　京	4.6	40.7	39.3
ハルビン	3.3	75.4	16.6
サクラメント	4.6	77.4	8.5
ストックホルム	10.5	64.7	13.4
オークランド	8.2	65.9	12.6
バンコク	7.1	67.4	17.8
ソウル	5.0	55.2	29.4
タイペイ	1.7	73.5	16.6

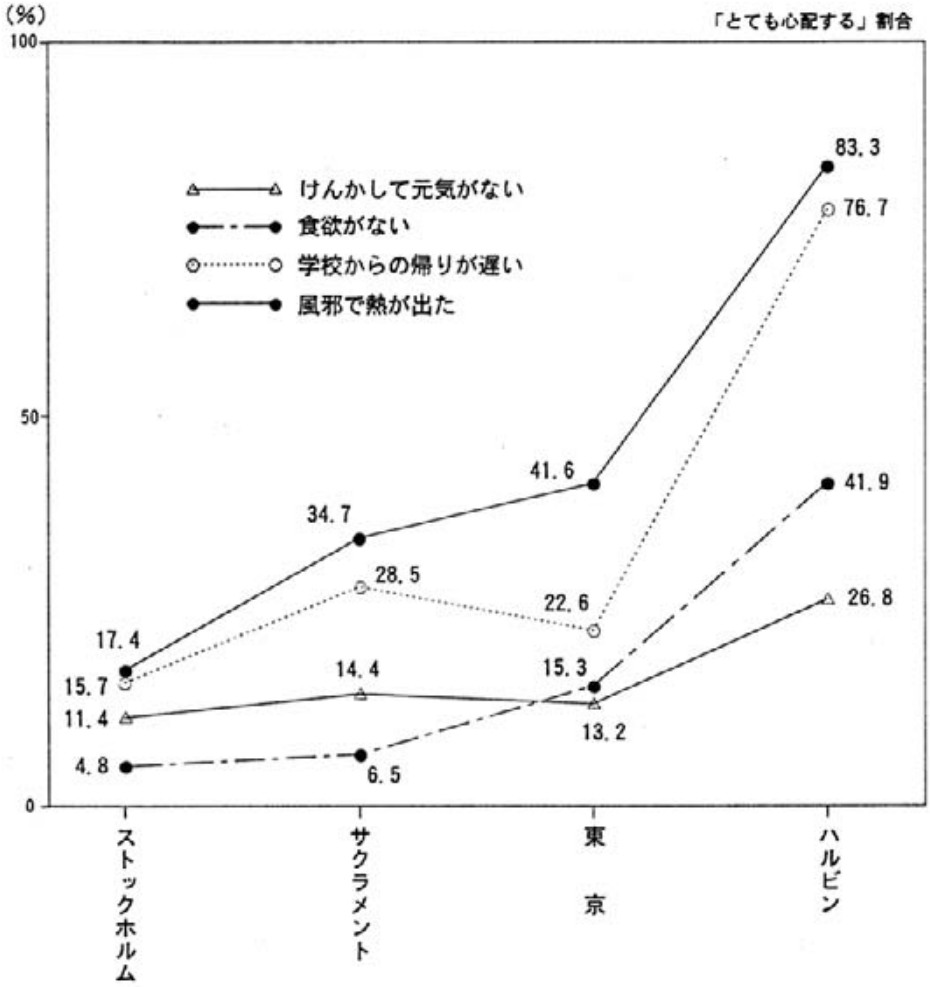
◯は最大値と2位
——は最小値

親からの保護

図1は、「けんかして元気がない」や「学校からの帰りが遅い」などのときに、親がどれくらい心配するかを子どもたちに尋ねた結果を示している。

ハルビンは北京から飛行機で1時間30分、黒竜江省の中心でロシア風の建物の並ぶエキゾチックな町だが、ここでも一人っ子政策が厳格にとられており、子どもたちの91％は「一人っ子」だと答えている。なお、少数民族は2人の子が認められているので、9％はそういう背景の子どもたちなのであろう。いずれにせよ、一人っ子なので親たちは子どもを大事に育てている。中国についてのルポルタージュなどでは、過保護な状態が「小皇

図1　親が心配するか



帝」(「小太陽」) などと報じられることが多いが、経済的にまだまだ豊かとはいえない上に社会主義の風土も残っているので、日本に感じるような過保護の雰囲気ではない。

それでも、図1のように、ハルビンの親はなにかある度に子どものことを心配している。発熱をしたら親が「とても心配する」と思う子どもが83%に達するのが、その一例であろう。

そうしたハルビンの親と比較して、ストックホルムの親が子どもの心配をしないのが目につく。具体例をあげるなら、発熱で「とても心配する」割合は17%にとどまっている。

福祉型社会として知られるストックホルムはかねがね訪ねてみたいと思っていた町であった。本調査に先立って、スウェーデン第2の都市マルメの学校でプリテストを行うことにした。ところが、プリテストを始めたとたん、子どもたちから答えにくいとの声があがった。

聞いてみると、「家族の人数」が答えにくいという。離婚の後、父親が連れ子のいる人と再婚し、それから妹が生まれた。連れ子は両方の家を行ったり来たりしているので、家族に入れなくてよいと思うがどうか。そうかと思うと、離婚してから、母親のもとに男性が泊まりにくるが、あの人を家族と呼びたくない。さらに、平日は母のもとで暮らし、週末は父の家に行く。僕にとって両方が家族と考えているが、それでいいか。

アメリカで調査をしているときも、「家族の人数」が答えにくいとの声が少なくなかった。家族というと「夫婦と未婚の子ども」から構成される核家族を連想する。しかし、現在では、仮に形の上では核家族でも再婚や連れ子、継父母などの関係が含まれるので、家族の構成が複雑になる。アメリカで調査をしたいくつかの学校の場合、多い場合は子どもたちの6割、少なくても4割が親の離婚を体験していた。

それでもアメリカの子は暗い感じで親の離婚を語っていた。ところが、ストックホルムの子はあっけらかんという調子で親の不和の話をする。親の離婚がそれだけありふれた現象なのかもしれない。

親はいつ離婚するかもしれない。だから、自分は自分らしく親に頼らずに生きていこう。そうした自立したおとなびた感じがストックホルムの子から伝わってくる。それはよいのだが、図1の通りに、ストックホルムの子は「食欲がない」や「学校からの帰りが遅い」などがあっても、親は心配しないだろうと思っている。

ハルビンの親のように、心配しすぎる親も問題であろう。しかし、ストックホルムの親のように、子どものことを気にしない、厳密にいうなら、子どもたちが親から「心配されていない」と思っているのは、問題がより深刻のように考えられる。

自信を欠く子どもたち

本論で紹介するように第4回の調査でも調査票作成段階で、家族の崩壊が問題になった。しかし、家族の質問を行いにくいのは、これまでの調査でも同じだった。

具体的には「お母さん（お父さん）が好きですか」などの設問が妥当性を欠くという。仮に「好き」と答えたとしても、そのとき子どもが「生みの母」をイメージしたのか、それとも「(現在同居している) 継母」を考えて答えたのかがわからない。かといって、「あなたが生活を共にしているのは生みの母親か、それとも継母か」と尋ねるのは子どもの心を傷つけそうなので、できることなら避けたい。

そうなると、「母親を好きか」と尋ねたところで、きちんとしたデータをとりにくいということになり、調査票から「母親」や「父親」を省くことになった。その代わりに、「朝ご飯を食べているとき楽しいか」や「あなたの家の人は仲がよいか」「あなたが病気になったら家の人は心配するか」など、家庭にいるときの居心地を尋ねることにした。

ちなみに、先ほどの「家族の人数」は「朝起きたときに何人で寝ていたか」で答えても

らうことにした。血がつながっていなくてもかまわない。一緒に暮らしていれば、家族になるという解釈である。

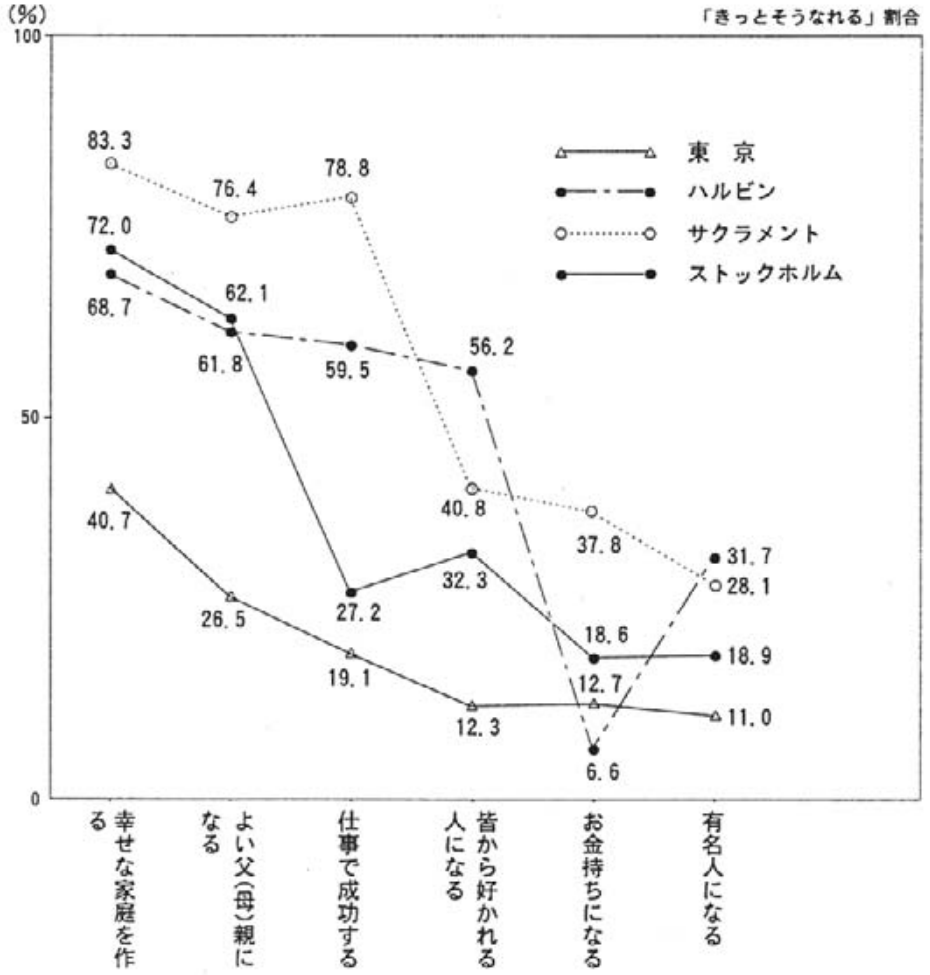
そう定義してから混乱はなくなり、ニューヨークやロンドンの調査はスムーズに進んだ。考えてみると、固定したイメージの家族が存在しなくなったのが、現在の家族をめぐる状況なのであろう。

そうした意味では欧米と比べ日本の家族は安定しており、子どもたちは親に依存し、親を信頼しているように思われる。それでは、その子どもたちは順調に成長しているのであろうか。

図2は、子どもたちに将来についての見通しを尋ねた結果である。図から明らかなように、サクラメントの子は将来に夢を抱いている。また、ハルビンの子も社会主義社会の子らしく「お金持ちになる」のはむずかしいかもしれないが、「幸せな家庭を作る」ことは「きっとできるだろう」と考えている。さらに、ストックホルムの子は福祉型社会を反映して、社会的な達成に意欲を示していないが家庭の幸福は確保できるだろうと将来を見通している。それに対し、日本の子は、社会的な達成はむろんのこと、家庭的な幸せについても見通しは暗いと感じている。

もちろん、日本の子どもたちの意欲の乏しさは教育過熱状況のもたらしたものであろう

図2　将来の見通し



が、親子関係に関係させるなら、日本の子どもたちは家庭が安定し、親たちに依存できる。というより、あまりに家庭の居心地がよいので、子どもたちが親から心理的に自立しにくい。そうした自立の遅れが日本の子どもたちを温室育ちにさせ、自分の判断で動いたことが少ない子にしてしまっている。そうした結果が子どもたちの自信のなさの形で現れているように思われる。

日本の家庭は、子どもを保護する機能は十分に果たしている。しかし、皮肉なことに家庭が安定していることが、子どもたちの社会的に自立しようという気持ちを抑制しているように思われる。子どもが一定の年齢に達したら、親の子離れと同時に、子の親離れが必要であろう。したがって、子どもの意欲を家庭を通していかに育てるのかが、日本の家庭のこれからの課題になってこよう。

第４回

国際教育シンポジウム報告書

「家族の中の子どもたち」

＊コーディネーター、パネリスト、ゲストのコメントは、シンポジウム当日配付されたパンフレット制作時点のものです。
なお当社名についても、当時の社名「福武書店」として記載してあります。

第4回
国際教育シンポジウム
報告書

「家族の中の子どもたち」

コーディネーター・パネリスト・ゲスト プロフィール

コーディネーター／基調報告

深谷昌志

静岡大学教授。1933年東京都生まれ。東京教育大学大学院博士課程修了。教育社会学専攻、教育学博士。主な著書に『孤立化する子どもたち』（ＮＨＫブックス）、『子ども考現学』（福武書店）、『無気力化する子どもたち』（ＮＨＫブックス）などがある。

子どもにとって家族が持つ意味は、社会によって異なっている。その実態を探りたいと昨年の初めから、ソウル、上海、ロンドン、そしてニューヨークと4つの都市で調査を重ねてきた。調査票作成段階で当惑することが多く、手探りの状況の中からひとつひとつ調査を行ってきたという感じだ。

これまで何とか調査を行ってこられたのは、それぞれの地域で協力してくださったたくさんの人たちのお蔭である。

さいわい、いろいろ考えさせられる内容を含んだ調査データを入手できた。そのうえ専門の著名な学者をシンポジウムにお呼びできたので、活発な話し合いで問題を深めていきたいと思っている。

今回の調査を、財政面はむろんさまざまな形で支援してくださった福武書店福武總一郎社長をはじめ社員の皆さん、特に教育研究所の皆さんのご協力に心から感謝したいと思う。

パネリスト

卞　立強

京都外国語大学教授。1932年中国安徽省生まれ。1955年北京大学東方語言文学部卒業。北京大学日本語科主任教授、アジア・アフリカ研究所副所長、日本研究センター副主任等を歴任。1988年来日、国際日本文化研究センター客員教授を経て、1989年より、京都外国語大学教授、早稲田大学特別研究員を担当。同時に上海外国語大学、上海大学、蘇州大学等の教授および研究員を兼任。島崎藤村、小林多喜二、田宮虎彦、陳舜臣などの文学作品および梅原猛の学術著作を翻訳。中国に40点あまり紹介。その他多くの学術論文等を発表。

中国でもよく知られている福武書店の教育研究所が主催する、第４回国際教育シンポジウムに出席でき、光栄に感じると共に勉強のよいチャンスだと思っている。

ご存知のように中国では今、いわゆる一人っ子政策をとっている。それは児童の教育に対してはもちろん、中国の社会や未来にも大きな影響を与えることであろう。

日本、韓国、英国、米国の学者と共に、中国の一人っ子政策を含めた児童教育に関する問題の検討は、多くの教育者にとって非常にためになる関心事であろう。

そして、シンポジウムでの成果を中国の教育者および関係者の方々に紹介し、その後の影響の拡大を考えている。

パネリスト

李　貴胤

梨花女子大学教育学部教授、同大学付属模範小学校校長兼任。1933年生まれ。1959年ソウル国立大学卒業。アメリカアイオワ州アイオワ大学にて教育学修士課程、1969年には博士課程修了。1959年より梨花女子大学付属模範小学校教諭、アメリカ、タマ小学校教諭、メリーランド州立大学教育学部研究員を経て、1979年より梨花女子大学教授。1988年より同大学付属模範小学校校長を兼任する。

他の諸外国同様、韓国も急速に変化する近代産業社会、そしてそれに関連する社会的・文化的諸問題に直面してきた。中でも、若者と高齢者との間で世代の断絶がしだいに拡大し、深刻の度を深めつつある。変化は不可避のことであるが、それは徐々に、しかも社会の伝統と調和を保ちながら進むものではないだろうか。

世代間の断絶から起きる問題、またそれは学校教育の中でどのように述べることができるのか。断絶の原因や学校と家庭での対処法とは。こういった諸問題の回答を考えたい。

パネリスト

エイドリアン・ファーナム

ロンドン大学心理学教授。学者、組織行動コンサルタント、著述家、マスコミでも活躍。1953年生まれ。1974年ナタール大学卒業。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで経済学修士、オックスフォード大学で博士号を取得。さらにロンドン大学から理学博士号を贈られる。また、イギリス心理学会会員であり、1980年代の世界で最も生産的な社会・性格心理学者とされる。応用行動研究アソシエイツ（心理学コンサルタント企業）の創業者兼所長であり、各種経営コンサルタント企業のコンサルタントも兼ねている。

若者に対する社会教育の方法は、社会の将来にきわめて大きな影響を与えることになるだろう。幼児と青少年の考え、行動、価値などは、詳細な研究に価する。通信、貿易、旅行などの機会が増え、世界は以前よりもずっと小さくなりつつあるが、にもかかわらず、世界各地の若者の行動には、依然として驚くほどの違いがみられる。３つの大陸の５か国から、魅力あふれるデータが提示されるこのたびのシンポジウムを通じてのみ、考えと行動の違いに対して寛大になることができる。

こうした違いがどのようにして、またなぜ生ずるのか、そしてそれは成人への成長過程にどのような結果をもたらすのか、私は他の参加者各位と共に、議論したいと考えている。

パネリスト

チャロル・シェークシャフト

ホフストラ大学教育学部主任教授。1979年以降、女性の教育行政職就任を促す機関の責任者を務める。教育における平等に関する研究により、アメリカ、カナダ、ヨーロッパの教育界で広く名を知られる。６種の教育誌の論説委員を務めるほか、アメリカ教育研究者協会の創立メンバーで、連邦公民権局の平等問題に関する専門家委員など、多くの要職を務めている。夫君はデール・マン博士、８歳の女児の母親でもある。アメリカの学校教育界での公的な経験と、一女性としての個人的経験の両方をふまえて著述活動も続けている。

家族は、アメリカで最も小さな学校とよばれている。家庭における出来事は、子どもたちが何を、どのようにして、いかに学ぶかということに影響を与え、結果的には、子どもたちが一人前の生産的な成人へと成長するか否か、ということにつながる可能性を持っている。

子どもの成長にとって価値あるものを社会資本と置きかえると、それは時間・資源・激励となる。だが、子どもの研究を行う研究者の多くは、健全で一人前の成人となるために必要な社会資本に恵まれない子どもの増加を指摘している。

子どもにとっての社会資本の喪失を反映している現実とは。

家族が子どもの社会資本への貢献で果たす役割を考えてみたい。

パネリスト

深谷和子

東京学芸大学教育学部教授。1935年東京都生まれ。東京教育大学大学院博士課程修了。児童臨床心理学・児童社会学専攻。千葉市在住、一男一女の母。

国際家族年を迎えて、今年は家族に関する調査データが次々と発表されている。しかし子どもの視点に立って、つまり私たちおとなの目に見えている家族ではなく、子どもの心の中にある家族の姿をとらえようとしたものは少なく、それが今回の第4回国際比較調査の大きな特徴であろう。ちなみに心理学では客観的現実と心理的現実を区別し、人にとってはむしろ心理的現実の方が大切だと考える。ピンクに塗られた壁も、もしある人にとってブルーと見えれば、それはピンクではなく、あくまでもブルーなのだ。今回の調査はそうした意味で種々むずかしい部分もあったが、各地域の多くの方にご協力を得て、いいデータが得られたことに感謝している。

ゲスト

李　光衡

東京韓国綜合教育院院長。1945年韓国慶南咸安生まれ。釜山大学校教育大学院修士課程修了。大韓民国教育部教科指導奨学官室、国際教育協力課、教育放送企画室、在外国民教育課、大学政策室に務めた(奨学官)。主な論文に『児童言語発達の実験的研究』、『学習不振児研究』などがある。

21世紀には世界主義と民族主義、世界化と地域化などの価値の多元化、知識の激増、文化の発信地と受信地間の空間的距離が問題にならない情報の同時化などが開放化・国際化と共に我々の精神的・物質的環境を急速に変化させるだろう。

多様化・情報化・国際化に象徴される21世紀を担っていく次代の子どもたちに自分ひとりだけではなく、近隣と共に生きていかなければならない共生社会、すなわち地球村のみんなが一家族になってお互いに助けあい、豊かで幸福な生活を営むためにはまずお互いのことを知り、お互いのことを理解し共感することができる人間になるように教育指導していかなければならないと思う。

そうするためには子どもたちに何よりも大事なお互いの文化を理解する国際性を養わなければならないが、福武書店教育研究所が4回にわたって実施した国際比較調査は21世紀の教育を如何に実践していくかについてとても重要な手引きになるばかりでなく、お互いを理解するのにたいへん役に立つと思う。

ゲスト

デール・マン

コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの上級教授、政治学者。専門は教育策定で、教育政策の分析とそれに基づく活動の両方を行う。コロンビア大学で教職に就く以前に、ジョンソン政権で教育分析の専門担当官を務めた。現在、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、エストニアといった「新しい独立国」における学校制度の改革に深くかかわっている。最貧困家庭児童のための学校教育改善に献身的に取り組む、35か国のメンバーからなる、有効な学校教育のための国際会議の創立者。夫人はホフストラ大学のチャロル・シェークシャフト博士。

アメリカ連邦教育省は次のように述べている。「両親は子どもたちの最初の、そして最も影響力の大きい教師である。親が子どもたちの学習を促すために行うことは、学業の成功にとって、家族の裕福さよりも重要である」と。

健全な発育の中心となるのは、両親やその他の保護者の一貫性ある関与である。青少年の才能開花を促す第一義的な要素は、愛情のこもった対応をする保護者、惜しみなく注がれるエネルギー……そして子どもの幸せに対する調和のとれた思いやり、などである。だがゆゆしい事態のひろがりが、アメリカの家族と子どもたちを引き裂いているようだ。アメリカの家庭が、無気力な成人を生み出している「早成児」シンドロームを回避するため、子育てのガイドラインを求めるのも不思議はない。我々に何ができるだろうか。提言を行いたい。

ゲスト

田村　毅

東京学芸大学教育学部助教授。1957年東京都生まれ。筑波大学大学院博士課程修了。医学博士。ロンドン大学留学。心理学修士（家族療法）。専門は児童精神医学、比較文化精神医学、家族療法。

児童精神科医として、不登校、無気力などの「問題」を呈している子どもたちやその家族に接していると、子どもの問題が、本人をとりまく環境（家庭、学校、社会など）と密接に関連していることを痛感する。3年間の英国留学中に多くのイギリス人の家族に接してきた。今回の調査では英国を担当し、久しぶりにイギリスの子どもたちに再会できた。

なぜ、日本ではこれほど不登校の問題が取りざたされているのだろうか。中国や韓国の受験戦争や、親が子どもの教育にかける期待は日本をはるかに超えている。しかし、不登校はほとんど見られない。また英国や米国では、別の形の「学校に行かない子どもたち」が大きな社会問題となっている。

日本と英国の臨床経験と、今回の調査をふまえ、日本と世界の子どもたちの家族の現状と、その問題点について掘り下げて考えてみたい。

Ⅰ．基調報告

家族の中の子どもたち

静岡大学教授
深谷昌志

家族の中の子どもたち

今回の国際比較調査は、今年（1994年）が国際家族年でもあり、「子どもにとって家族とは何か」について上海、ソウル、ロンドン、ニューヨーク、東京で実施しました。詳しくお話をしておりますときりがありませんが、家族の問題というのはそれぞれの社会によって具体的な姿が違っておりまして、それだけに調査票を作る段階で、非常に苦労いたしました。

例えば、ロンドンやニューヨークの場合、「お母さんが好きですか」という質問に、お母さんが本当のお母さんなのか、離婚して再婚した後のお母さんなのか、そういうこともわからないからその質問はやめた方がいいとか、いろいろなアドバイスがありまして、かなり苦労しながら調査票を作りました。

もう一例をあげますなら、「何人家族か」も答えにくいというのです。離婚や再婚があって、家族の範囲がわかりにくくなっているからだと思います。「調査レポート」の巻末に調査票がございますのでご参照ください。我々の苦心の一端がわかっていただけるのではないかと思います。

サンプル、調査時期は、表１、表２に示した通りです。調査対象は、東京、上海、ソウル、ロンドン、ニューヨークの小学校５年生で、4,964人の子どもさんたちのご協力をいただきました。

表1　調査対象地域・時期

都市名	調査時期
東　京*	1993年5月～7月
上　海	1993年5月
ソウル	1993年10月
ロンドン	1994年1月
ニューヨーク	1994年3月

＊東京に札幌・千葉・名古屋・岐阜を合わせ、総称として「東京」を使用。以下同。

表2　サンプル数

（人）

	東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク	全体
男子	899	369	472	271	505	2,516
女子	895	404	449	244	456	2,448
計	1,794	773	921	515	961	4,964

●家族の状況)))

それでは、これから結果の報告に入ります。大きく分けてまず、どういう家族の状況だったか、2つ目に子どもたちの家族の中での暮らしはどうなっているのか、3つ目は親子関係がどうなっているのか、4つ目にお父さんとか、お母さんとかというような、ジェンダーロールとよくいわれますが、性差の問題、以上の4つに絞ってご報告させていただきたいと思います。

まず家族の姿について、表3をご覧いただきたいと思います。子どもの数でございます。すでにお気づきの方もいらっしゃるかと存じますが、この値は際立った傾向が目につきます。まず1つは、上海はご承知の通り、一人っ子政策をとっておりますので、上海の一人っ子の割合は93%で、一人っ子の社会だと

表3　子どもの数

(%)

	東　京	上　海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
1人	9.7	93.2	8.8	9.0	5.9
2人	54.0	4.9	60.5	35.3	39.0
3人	30.1	1.9	20.5	30.5	32.9
4人以上	6.2	−	10.2	25.2	22.2

いうことです。

それと比べると、東京とソウルは二人っ子の文化だということがすぐわかると思います。ロンドンとニューヨークというのは、3人以上のお子さんが、ロンドンは56%、ニューヨークでは55%というように、意外に子どもが多い社会だということがわかります。

次に表4に移っていきますと、これは子どもたちが「誰と同居しているか」ということなのですが、さすがに「お母さんと同居している」という割合が多いということが、どこの社会にも共通しております。ただし、「お父さんと同居している」割合が、ロンドンとか、ニューヨークでは低くなっております。例えば、ロンドンでは「お父さんと同居している」が79%ということは、21%が父親と同居していないということになります。この辺りにも家族の崩壊がいわれているヨーロッパ、アメリカの姿の一端がうかがえるような気がします。

表5は、お母さんの就労形態をみたものです。ここでも大きく3つの傾向が読み取れるだろうと思います。まず上海では、フルタイムで働いているお母さんが92%います。ということは、上海は子どもは一人っ子で、お母さんが働いている社会であるということがわか

表4　同居家族

(%)

	東　京	上　海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
祖父	14.8	12.9	6.1	1.6	7.2
祖母	22.6	18.5	12.3	2.1	10.8
父親	94.0	93.3	94.7	78.6	85.1
母親	98.5	95.1	96.0	95.0	96.8
兄弟	89.4	4.7	87.7	89.5	88.6
その他	3.5	4.2	7.1	9.1	11.8

表5　母親の職業

(%)

	東　京	上　海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
専業主婦	32.6	2.4	45.3	30.0	29.1
パートタイム	18.0	2.9	6.4	18.5	26.1
フルタイム	17.5	92.1	20.7	31.8	29.3
店の経営	7.2	1.4	15.9	1.2	2.8
その他	24.7	1.2	11.7	18.5	12.7

ります。それと比べて東京、ソウルは専業主婦の割合が比較的高く、またお子さんが2人くらいということは、この2つの都市は専業主婦のお母さんが多い文化圏だということになります。また、ロンドンは専業主婦のお母さんとフルタイムで働いているお母さんが、ちょうど半分ずつという感じになります。つまり、子どもが多く、お母さんは働いていたり家にいたりする。ただし、お父さんとの会話がちょっと少なくなっているところに、家族の崩壊の一端がうかがえます。以上が、あらくつかんだ全体のプロフィールでございます。

●家族の中の子どもたち)))

2番目の問題になります。子どもたちは家族の中で生活しておりますので、家族との暮らし方の問題に入っていきたいと思います。「朝ご飯をどこで食べているか、そのとき誰といるか」について、報告書の中では具体的な細かな数字が上がっております。東京では96%が「自宅で」朝食を食べていますが、ロンドンでは21%が「学校で」朝食をとっています。家庭の崩壊した姿がここにも認められますが、東京の場合、父親の不在が25%と、5つの都市の中で最大に達しております。

表6でございます。これは、「誰と寝てい

表6　誰と寝ているか

(%)

	東　京	上　海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
1人で	29.2	58.1	31.7	61.6	71.6
兄弟と	40.5	1.4	40.9	35.3	26.3
おとなと	24.4	40.0	23.1	1.2	1.0
その他	5.9	0.5	4.3	1.9	1.1

るか」についてです。ここでも大きく２つの文化圏の違いというのが目につきます。１つはロンドンとニューヨークです。大多数の子どもたちは「１人で」、あるいは「兄弟と」寝ており、基本的には１人で寝ています。先ほどお話しした通り、ロンドン、ニューヨークというのは子どもが多いわけですが、それでも１人で寝ています。基本的には１人で寝る文化圏なんですね。それと比べると、東京、上海、ソウルでは、「おとなと寝ている」という割合が結構多いですね。こうしたデータを見ると、上海、ソウル、東京というのは子どもたちがまだまだ家族と一緒に暮らしている社会というような印象をお持ちになると思います。

そうした中で、子どもたちに、今一緒にいる家族についての評価をしてもらったのが、表７になります。これは子どもたちに、「あなたの家族はどんな家族ですか」と聞いて、「とてもその通り」と思った割合を示しております。５つの都市の中の最大値に ⬭ がついてございます。時間の関係で、説明の便宜上、その ⬭ のところだけを注目していただきます。

⬭ の多いのは上海ですね。子どもたちによれば、他の社会と比べると、「家族の仲がよく、お互いに助けあって、親戚と仲がよく、みんな幸せ」という結果が得られています。したがって親戚と一緒に助けあいながら、仲がよい家族というのが、上海の子どもたちの家族についてのイメージということになります。

表７　家族評価（まとめ）

（%）

	東　京	上　海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
経済的に豊か	27.7	20.4	22.0	19.4	52.9
食事がおいしい	52.4	55.6	38.0	69.9	73.6
家族が仲がよい	40.8	82.3	53.1	52.9	53.5
お互いに助けあう	21.0	72.4	35.8	48.1	70.9
近所とよくつきあう	21.3	41.0	34.7	44.7	64.8
親戚と仲がよい	45.9	75.1	49.6	48.2	62.6
みんなが幸せ	37.2	77.8	48.1	39.4	56.3
「とてもその通り」の平均	35.2	60.7	40.2	46.1	62.1

「とてもその通り」の割合
⬭ は１位
⬭ は２位
── は５位

それと対照的なのがニューヨークでございまして、〇が違っていますね。ニューヨークの場合は、「あなたの家庭は？」といったとき、「経済的に豊かで、食事がおいしくて、近所とよくつきあっている」というあたりがニューヨークの子どもの考えです。ですからどちらかというと、開かれた家族という感じがわかります。親戚とつきあっていて、仲がよいのが上海の家族、ニューヨークの場合は近所とつきあいながら、お互いに開かれた家族といった印象を持ちます。

そうした中で、子どもたちに「家の中での居心地」を尋ねました。その結果が表8になります。いろいろと家族が問題だといわれている中で、今回我々が調査した地域が比較的安定した地域だったということもあると思うのですが、「あなたの家庭は楽しいですか」と聞きましたら、さすがに「とても楽しい」が4割から5割の一定の比率を示しておりますし、「のんびりしますか」といいますと、「のんびりする」という子どもが多くなっております。ちょっとほっとした反面、表下の2つのうち、「緊張する」については、「緊張する」という答えがロンドン、ニューヨークの家庭に多く、それぞれ15%、18%。また「いらいらする」というのも、アジア圏の家庭よりも「いらいらする」割合がロンドンとかニューヨークで多くなっております。ということは大きくつかんだ場合、欧米圏の子どもたちは開かれた家庭の中で楽しく暮らしているのだけれど、なぜかよくわからないが緊張感のある家庭の中で暮らしているという感じがいたします。

それに比べて、「あなたは幸せか」と聞いた結果が図1にあります。これは家庭の問題だけでなく、学校の問題もからんでくると思うのですが、これをみてみますと、一番幸せだというのが、上海の子どもたちです。ということは一人っ子で、お父さん、お母さんは働いているかもしれないけれど、わりと仲よく家族の中で暮らしているのが、上海の子どもだということがわかります。

また、ニューヨークの場合も先ほどお話しした通り、豊かで近所づきあいをしながら、楽しく暮らしている。多少緊張感もあるし、お父さんがいない部分もあるかもしれないけれど、でもやっぱり幸せだという感じになります。

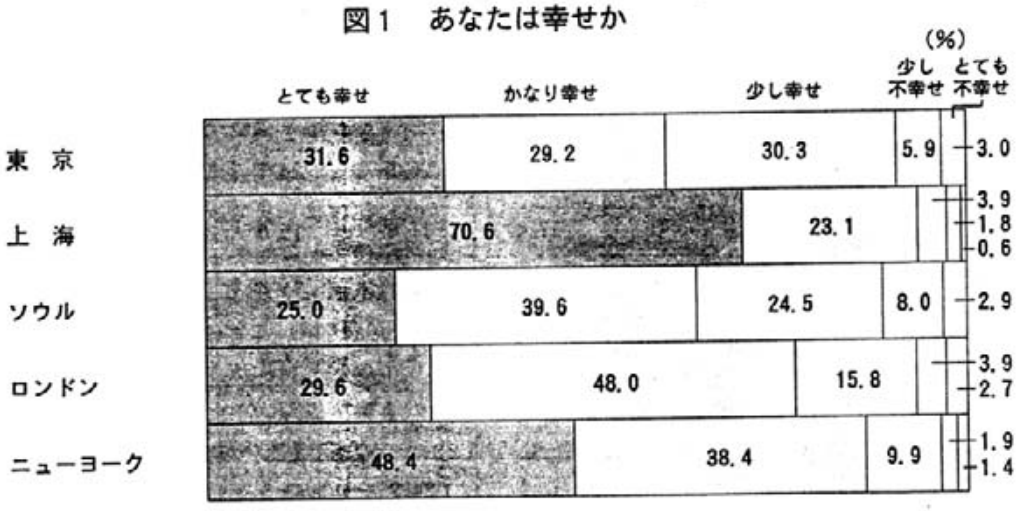
家族の形は都市によってかなり違っているのにもかかわらず、上海とニューヨークの子どもが楽しいといっています。それと比べると、ソウルの子どもたちの幸せ感が少し欠けるのは、もしかしたら、今回のテーマではありませんが、受験勉強などの影がこういうところにも現れているのかもしれないという感じがしました。

表8　自分の家の居心地

(%)

		東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
楽しい	とてもそう	41.6	52.9	42.8	49.3	66.5
	わりとそう	23.5	26.8	24.7	29.5	20.2
	少しそう	17.4	11.6	15.0	11.6	8.6
	あまりそうでない	10.2	4.1	9.9	4.7	2.4
	ぜんぜんそうでない	7.3	4.6	7.6	4.9	2.3
	否定率	17.5	8.7	17.5	9.6	4.7
のんびりする	とてもそう	37.9	24.2	47.5	47.3	57.9
	わりとそう	24.0	27.6	28.1	27.6	26.0
	少しそう	19.5	19.5	10.9	12.5	8.0
	あまりそうでない	9.5	18.3	8.1	6.2	4.4
	ぜんぜんそうでない	9.1	10.4	5.4	6.4	3.7
	否定率	18.6	28.7	13.5	12.6	8.1
緊張する	とてもそう	1.4	1.2	4.8	4.7	7.6
	わりとそう	2.1	4.6	7.9	10.3	10.5
	少しそう	4.5	9.0	10.3	16.2	18.5
	あまりそうでない	14.2	28.5	30.2	20.3	19.4
	ぜんぜんそうでない	77.8	56.7	46.8	48.5	44.0
	肯定率	3.5	5.8	12.7	15.0	18.1
いらいらする	とてもそう	4.5	1.4	5.2	15.6	8.1
	わりとそう	5.7	4.3	9.7	15.4	13.0
	少しそう	10.1	7.8	12.3	17.5	17.7
	あまりそうでない	24.1	27.4	27.2	24.5	22.4
	ぜんぜんそうでない	55.6	59.1	45.6	27.0	38.8
	肯定率	10.2	5.7	14.9	31.0	21.1

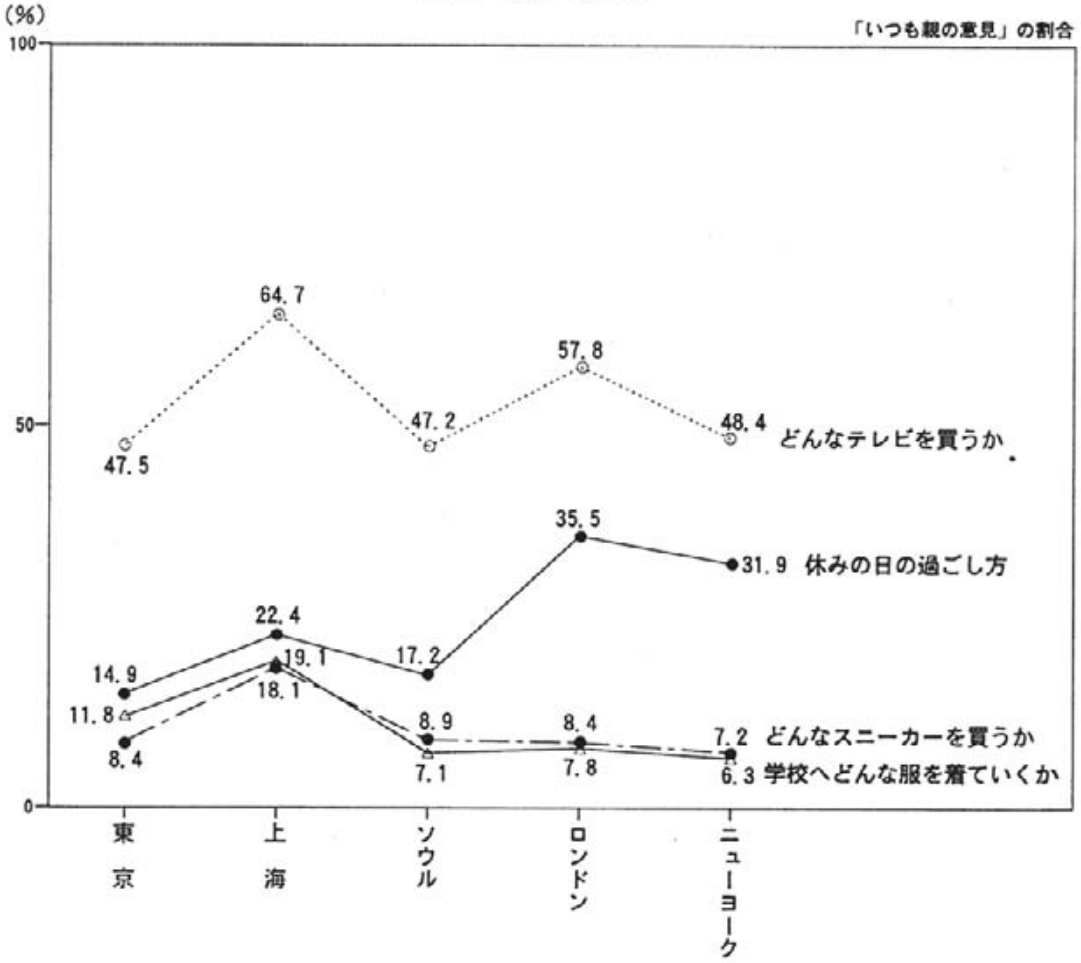
図1　あなたは幸せか


(%)
とても幸せ
かなり幸せ
少し幸せ
少し不幸せ
とても不幸せ
東　京
31.6
29.2
30.3
5.9
3.0
上　海
70.6
23.1
3.9
1.8
0.6
ソウル
25.0
39.6
24.5
8.0
2.9
ロンドン
29.6
48.0
15.8
3.9
2.7
ニューヨーク
48.4
38.4
9.9
1.9
1.4

●親子関係のあり方)))

3番目に先ほどお話しした親子関係についての結果を、いくつかご覧いただこうと思います。図2をご覧ください。この中で、ロンドンとニューヨークのデータに私どもは目を向けました。と申しますのは、これは「親が決めますか」という項目なのですが、例えば、「休みの日の過ごし方」を親が決めるのか、子ども自身が決められるのかというような形で聞いた中で、ロンドンとかニューヨークの場合は、「休みの日の過ごし方」などは親が決めています。それと比べると「スニーカーを買う」とか、「学校に行くとき、どんな服を着ていったらいいか」ということは、子どもの自由に任せているわけですね。ということは、ロンドンとかニューヨークでは、親が決める領域と、子どもの自主性に任せている領域とがはっきり分かれているという印象を受けます。親がきちんと指導するところと、

図2　親が決める



子どもに任せるところがはっきり分かれています。

それに比べると、例えば東京と上海がそうですが、「テレビを買う」という項目は別として、あとの3つの項目はほとんど一致いたします。つまり、親が決める項目と子ども自身が決める領域とがはっきり分かれていないような印象を受けます。

さらに、表9をご覧いただくとわかる通り、「歯をみがきなさい」と一番上にありますが、これは歯を大事にする文化圏の問題もありますから何ともいえないのですが、「家の手伝いをしなさい」とか、それから3番目の「もう寝なさい」ということについて、ロンドンやニューヨークの親たちの注意する割合が東京、上海、ソウルよりも高くなっております。ということは、かなり欧米の親たちは子どもたちをきちんとしつけているという印象を持ちます。

その中で「もっと勉強しなさい」は、上海の子どもたちに高くなっています。これは一人っ子政策で、子どもが1人しかいないために、親の教育熱心さが数値に反映したものと思われます。さらに上海においても、学歴社会の影がしのびよっており、こうした背景がこの辺に見受けられるような感じがいたします。

表9　親から言われること

(%)

		東　京	上　海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
きれいに歯をみがきなさい	いつも言われる	17.5	38.8	23.2	42.2	57.1
	かなり言われる	15.9	19.9	19.2	16.5	17.3
	少し言われる	30.3	13.7	24.7	15.7	11.3
	あまり言われない	25.1	10.3	22.8	11.8	7.1
	まったく言われない	11.2	17.3	10.1	13.8	7.2
家の手伝いをしなさい	いつも言われる	7.1	5.0	6.7	20.5	23.8
	かなり言われる	8.8	22.1	11.0	19.1	24.2
	少し言われる	23.0	34.7	25.1	25.6	21.6
	あまり言われない	30.5	22.2	33.1	16.7	15.3
	まったく言われない	30.6	16.0	24.1	18.1	15.1
もう寝なさい	いつも言われる	21.0	29.2	18.8	32.5	53.1
	かなり言われる	21.6	27.5	24.3	17.6	19.1
	少し言われる	25.5	17.6	22.3	19.7	12.8
	あまり言われない	18.6	13.7	16.5	15.6	8.7
	まったく言われない	13.3	12.0	18.1	14.6	6.3
もっと勉強しなさい	いつも言われる	17.7	70.1	26.9	23.2	29.6
	かなり言われる	17.1	17.9	29.4	13.8	22.9
	少し言われる	25.5	4.8	27.7	18.4	19.4
	あまり言われない	20.5	4.2	12.1	16.4	13.6
	まったく言われない	19.2	3.0	3.9	28.2	14.5
テレビばかり見ていてはいけません	いつも言われる	8.0	33.2	14.1	13.7	17.0
	かなり言われる	12.8	27.8	22.5	13.3	14.3
	少し言われる	26.2	17.5	27.0	20.5	25.7
	あまり言われない	27.8	11.7	24.1	19.9	19.4
	まったく言われない	25.2	9.8	12.3	32.6	23.6

表10に進んでください。前述した親子関係の違いが一番シャープに出てきているのが、この部分ではないかと思います。例えば「もっと親と話す時間がほしい」とか、「もっと親が自分の世話をしてほしい」とか、「もっと親が自分と遊んでほしい」というような形で、親に対する期待の大きさ、愛着の強さのようなものが出ております。図3は表10の中から「もっと親が自分の世話をしてほしい」という割合を抜き出して示しておりますが、上海、ソウルというのはほとんどプロフィールが一致しております。ということは、親へのいろいろな願いや愛着が強いということではないでしょうか。

表10　親への期待

(%)

		東京	上海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
もっと親と話す時間がほしい	とてもそう思う	18.1	56.5	38.2	18.2	24.4
	わりとそう思う	28.6	31.1	36.6	39.3	34.9
	あまりそう思わない	36.8	9.2	19.9	27.7	24.3
	ぜんぜんそう思わない	16.5	3.2	5.3	14.8	16.4
もっと親が自分の世話をしてほしい	とてもそう思う	8.3	45.4	44.7	14.7	14.1
	わりとそう思う	16.9	30.4	29.0	27.7	25.4
	あまりそう思わない	50.1	18.0	18.0	25.3	30.4
	ぜんぜんそう思わない	24.7	6.2	8.3	32.3	30.1
もっと親が自分と遊んでほしい	とてもそう思う	24.4	42.4	34.3	19.7	26.8
	わりとそう思う	26.4	29.2	28.2	28.3	31.6
	あまりそう思わない	32.3	19.6	25.9	25.4	23.8
	ぜんぜんそう思わない	16.9	8.8	11.6	26.6	17.8
親がうるさく言わないでほしい	とてもそう思う	26.4	37.9	28.8	14.9	20.2
	わりとそう思う	29.6	33.4	29.5	34.3	35.1
	あまりそう思わない	29.9	18.7	29.1	31.7	25.9
	ぜんぜんそう思わない	14.1	10.0	12.6	19.1	18.8

一方、ロンドンとニューヨークでは、それほど親に何かしてほしいという気持ちを5年生の子どもたちはあまり持っていないようです。そして東京は、どちらかというと、こういうカテゴリーでいくと、ロンドンとニューヨークにやや似てまいります。ですから上海とソウルというのは、子どもたちが親にいろいろなことをこうしてほしい、ああしてほしいという、見方によると甘えみたいな気持ちを持っている社会だと思うのですが、以下の「結婚後、親とどれくらい離れて住みたいか」「親が老後、歩けなくなったらどうするか」の質問に対する結果をみてみると、ただ甘えだけとはいいにくい部分もございます。

図3　もっと親が自分の世話をしてほしい

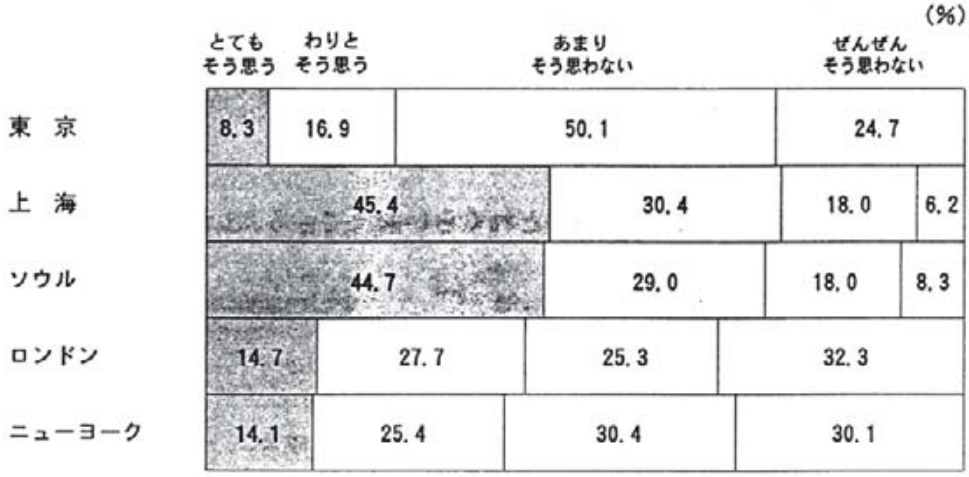
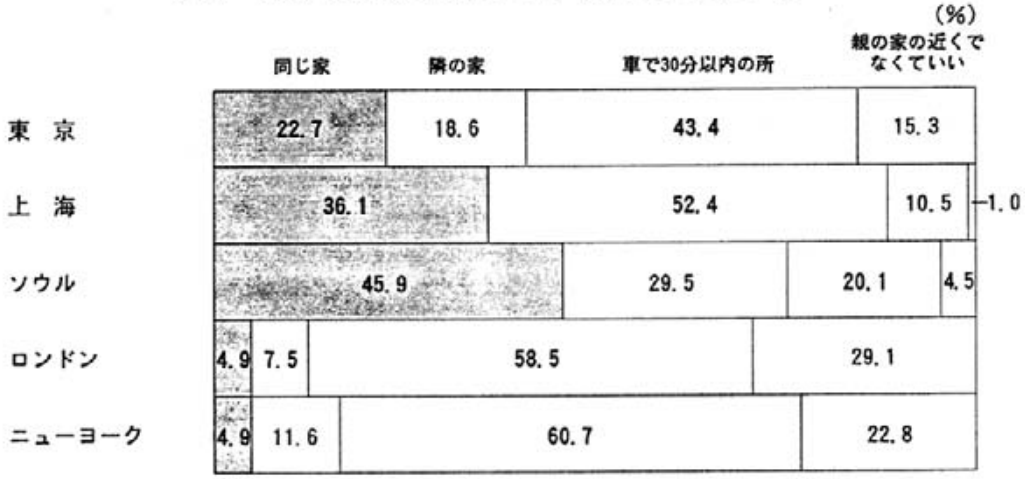


図4は、「結婚後、親とどれくらい離れて住みたいか」という割合です。ここでもソウル、上海とロンドン、ニューヨークとではかなり違いが目につきます。例えば、「結婚後、親と同じ家に住みたい」というのは、ソウルでは46%、上海では36%ですが、それに比べるとロンドンとかニューヨークでは、一緒に住むのではなく、「車で30分くらい」の、スープのさめないくらいの所に住みたいといっています。

次に図5をご覧ください。これは「親が老後、歩けなくなったらどうするか」といった状況を限定して聞いた場合ですが、ここでも上海とソウルの場合は「自分の家で世話をしたい」という結果が得られています。ということは、実際にソウルと上海の子どもたちが親の老後の面倒をみられるかどうかは別の問題としましても、上海とソウルの子どもたちというのは、親の老後の面倒をみたいと思っている。そうした意味では親に甘えているだけではなしに、親の面倒をみていきたいといっているわけです。これは儒教的というのかどうかは別の問題といたしまして、家制度というものが子どもたちにかなり浸透しており、子どもたちが家を基盤にして生きていこうという感じを強く持っているということが

図4　結婚後、親とどれくらい離れて住みたいか

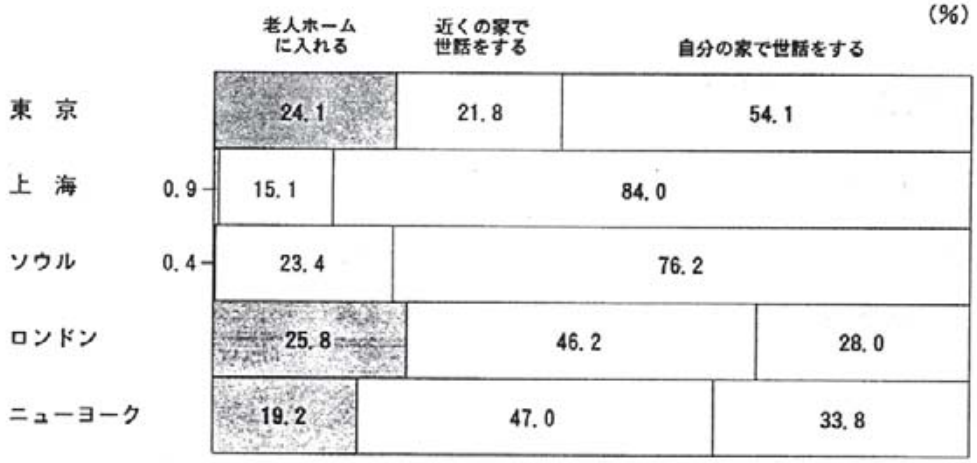


いえると思います。

それと比べるとロンドンとニューヨークの場合には、もちろん「自分の家で世話をしたい」という子どもさんもおりますけれども、親と子どもとの世代は別々の世代であり、子どもたちはたぶん自分の今いる家から出ていって自立していくのだろうと思います。そうした意味で、家については、例えば上海、ソウルのように今の家の中でずっと暮らしていく形と、一度自立して自分の家を持つ形というふうに2つのタイプが考えられます。

そういう言い方をしますと、東京の場合には上海とかソウルのように、家が大きく重くのしかかっている、あるいは今の家の中で生きていこうということでもない。といって、ロンドンやニューヨークのように自立というわけでもないし、ちょうど過渡期にあって、これからもう一度上海の方に戻るのか、あるいはロンドンやニューヨークの方の欧米形に入っていくのか、分岐点にきているような印象を受けました。それが、3番目のテーマでございます。

図5　親が老後、歩けなくなったらどうするか



●性差との関連で)))

4番目にジェンダーロールといわれるようなお父さん、お母さんの問題を最後に要約しておきたいと思います。表11になります。これは、子どもたちに「こういうことは誰がするのですか」と聞きました。その結果、「たいていお母さんがする」のは、さすがに「夕食

表11　母親がする割合

(%)

	東　京	上　海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
夕食を作る	95.0	67.9	88.9	79.1	77.9
一番早く起きる	65.8	51.1	56.5	45.0	36.4
子どもを叱る	50.2	48.2	48.3	32.6	21.0
世の中のできごとをよく知っている	17.2	13.3	7.5	25.4	17.7
仕事で疲れている	11.9	33.9	23.7	31.4	15.7
遊んでくれる	11.8	27.0	22.9	23.4	14.7
収入が多い	5.9	26.3	9.7	20.8	6.9

「たいていお母さんの方」の割合

を作る」がトップにきています。上海の場合はちょっと少ないですが、他はだいたいお母さんが作っています。あるいは表12の「父親がする割合」の一番下ですが、「収入が多い」というのはお父さん。ニューヨークは必ずしもお父さんとはいえないようですが、社会を超えて、例えば夕食を作るのはお母さん、収入が多いのはお父さんという形の、お母さんとお父さんの役割分化みたいなものを大きなマスの目でつかまえた場合には、文化の差を超えてかなり共通しているだろうと思います。ただもう少し個別にみてまいりますと、かなり違いが出てまいります。

表12　父親がする割合

(%)

	東　京	上　海	ソウル	ロンドン	ニューヨーク
夕食を作る	2.0	23.1	2.4	9.3	6.8
一番早く起きる	22.2	24.1	26.8	38.0	46.0
子どもを叱る	16.5	32.0	16.6	24.9	17.2
世の中のできごとをよく知っている	46.4	70.0	60.3	35.6	25.2
仕事で疲れている	68.0	48.5	48.0	41.5	50.0
遊んでくれる	47.8	42.2	32.5	23.9	23.5
収入が多い	79.5	60.9	71.1	56.1	41.8

「たいていお父さんの方」の割合

例えば図6です。正直いいますと、調査票を作成して結果が得られた場合、うまくいった項目とそれほどうまくいかなかった項目がございます。これ（図6）などは、うまくいった、いい結果が出たなとニコニコ笑っている結果でございます。

これは「お母さんが遅くなったとき、夕食は誰が準備しますか」という質問ですが、ここでは子どもたちの反応が3つに分かれています。お母さんが遅いのですから「お父さんが夕食を作る」というのが、上海、ロンドン、ニューヨークになります。実線のところです。それから、お母さんが遅いとき、「子どもたちが何とかしようじゃないか」というのがソウルになります。「お母さんがとにかく作っておく」というのが日本になります。そうすると、お母さんが出かけるとき、お母さんが最後まで、家のことをやっていこうというのが日本ですね。それから上海、ロンドン、ニューヨークの場合には、いざとなればお父さんが代わりにやる。ソウルの場合には子どもが出てくるところがいいですね。たぶん韓国の男性たちはメンツにかけて、料理をしないのではないでしょうか。何となくそんな感じがいたします。

図6　母親が遅いときの夕食の準備

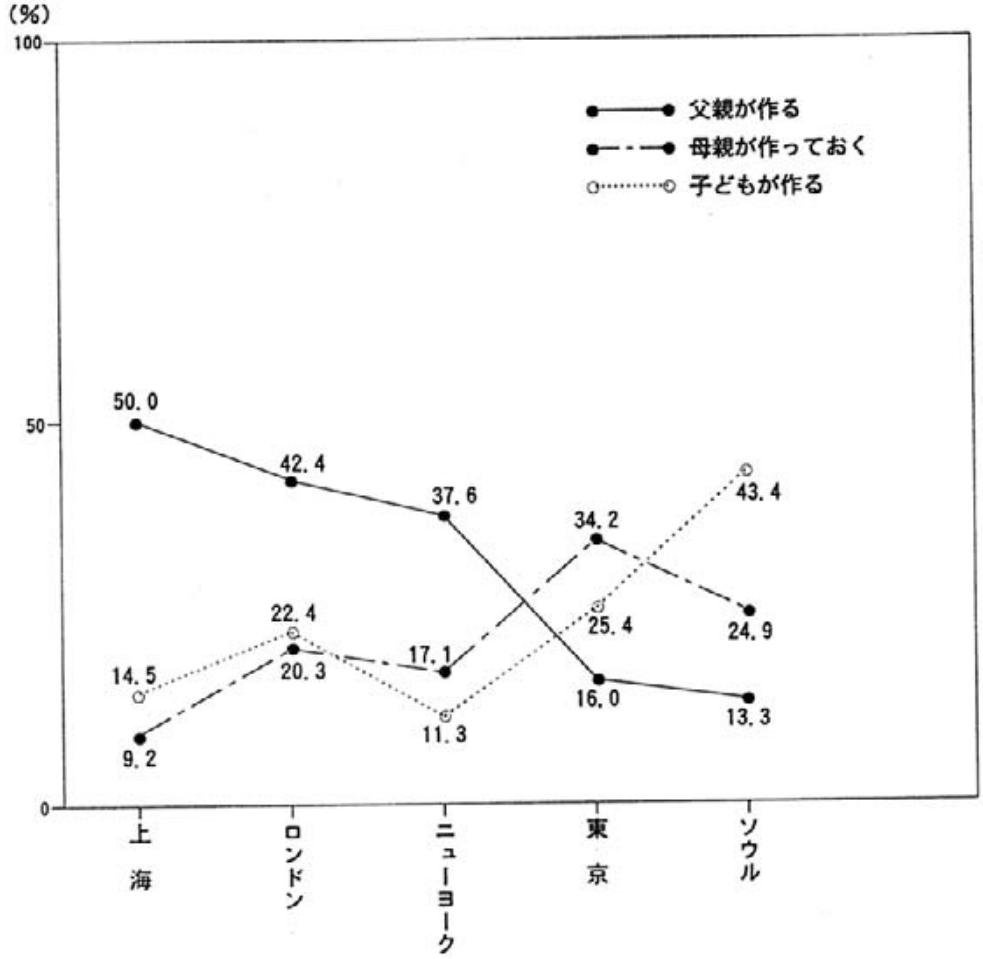
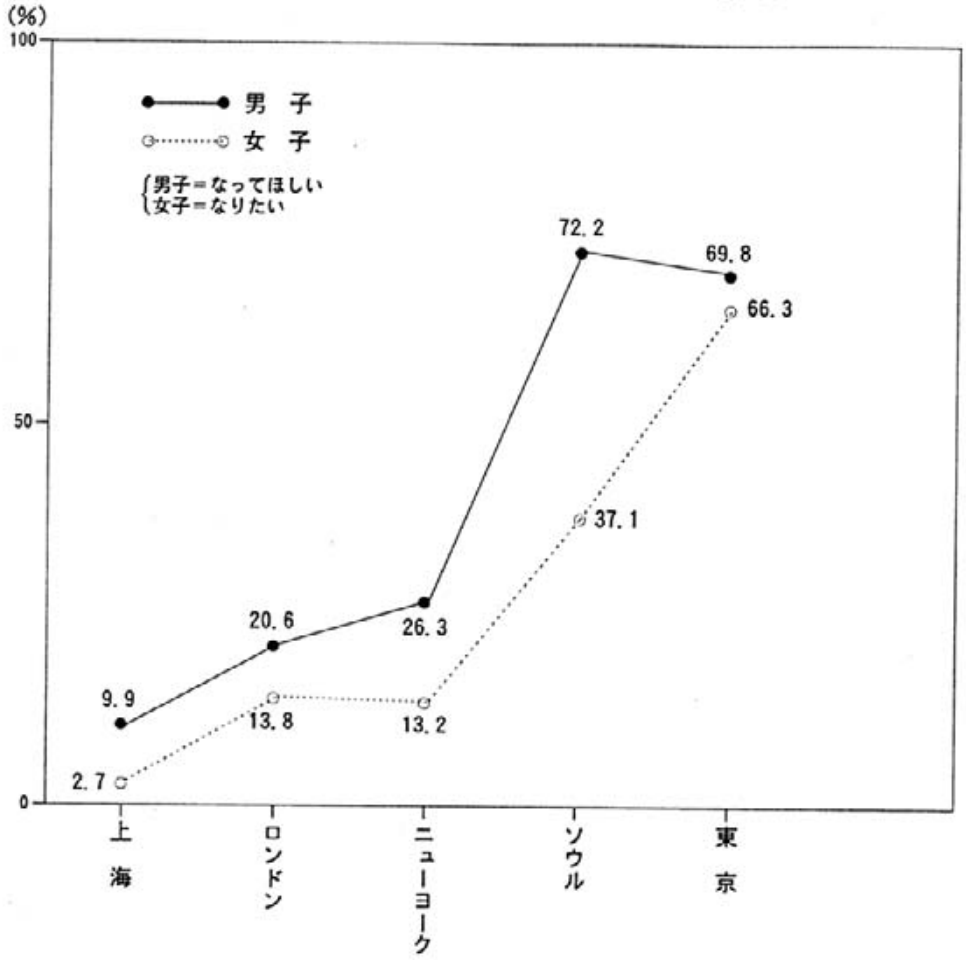


図7は、子どもたちに「将来どういう生き方をしたいか」を尋ねたものです。これは、実線と点線で示してあります。点線は、女の子たちが「専業主婦の生き方をしたい」と答えている割合です。実線は男の子たちが「結婚したら、奥さんは専業主婦になってほしい」と答えた割合です。ここでも大きく3つに分かれますね。

1つは東京です。女の子も専業主婦になろうと思っているし、男の子たちも専業主婦になってほしいという男女の願いが一致している社会です。逆に上海、ロンドン、ニューヨークでは、女の子も専業主婦になる気はなく働いていたいという。男の子たちも奥さんが働くことを認めている社会ということになるわけです。そうした中でソウルでは、男の子と女の子の違いがはっきり出ていまして、男の子は、できたら奥さんになる人は日本以上に、専業主婦になってほしいわけです。一方女の子たちは、できたら仕事を持ちたいといっています。ですから将来、ソウルではこの問題について、男女間で生き方に対する大きな違いが起きるのではないかという印象を強く持ちました。

図7　専業主婦の生き方（「わからない」を除く）

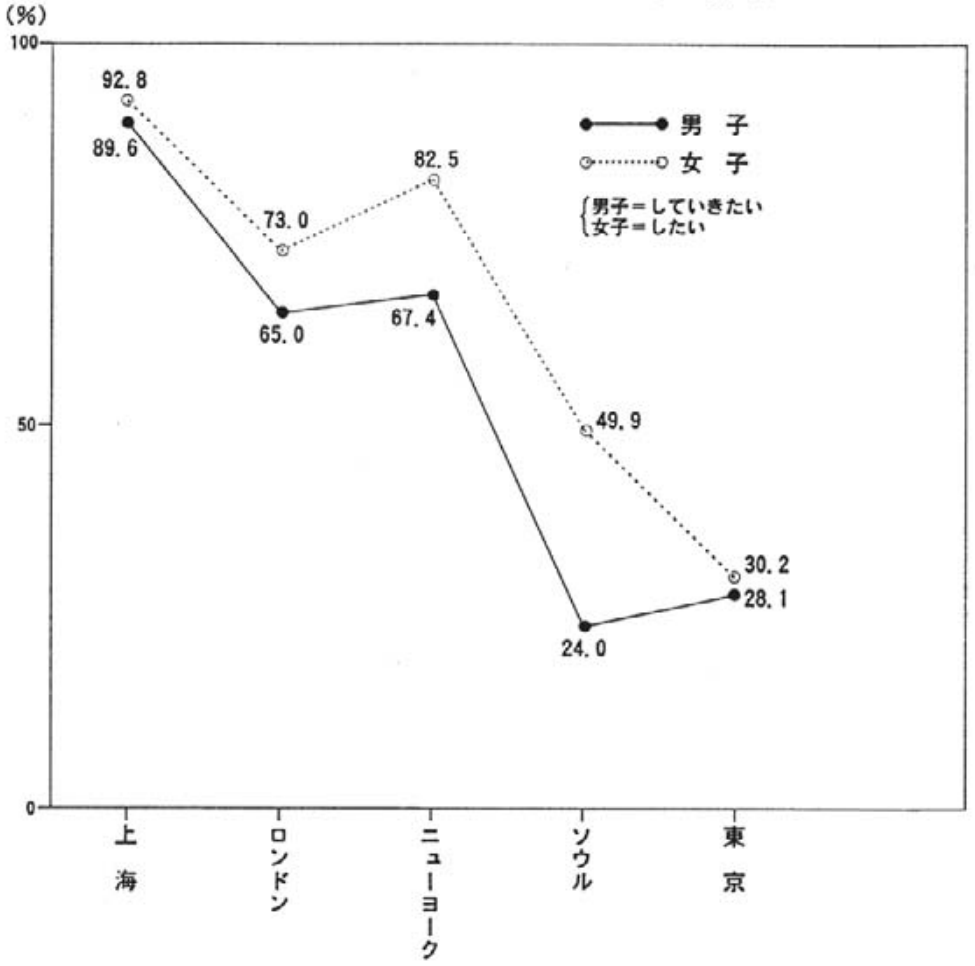


同じような結果が得られたのが図8です。これは、共働きを望む割合になっております。こうして見ますと、上海、ロンドン、ニューヨークは、基本的に子どもたちは、子どもの段階から共働きの、性差の少ない社会を予想しています。それと比べると、東京は専業主婦に象徴される性差の大きな社会を予想しています。ソウルの場合、男の子と女の子の間で開きが認められるということになります。

最後になりますが、図9をご覧ください。これは、「結婚したときに母親が食事の準備をした方がいいと思うか」を尋ねた結果で、東京、ソウルでは男女差が出ています。しかしロンドン、ニューヨーク、上海では、男女差が少ないという結果です。以上が、ごくあらく見ました調査結果でございます。

もっとも正直いいまして、今度我々が調査できましたロンドンとニューヨークといいますのは、調査概要にございますが、比較的安定した地域でございます。例えば、ニューヨークのダウンタウンでは、残念ながら我々の力量では調査ができませんでした。ニューヨ

図8　共働きの生き方（「わからない」を除く）



ークは、ニューヨークから小1時間ほど離れたロングアイランドの郊外の地域で調査をしましたし、ロンドンも日本のつくば学園都市のようなミルトンケインズで調査を行いました。ですからこの結果から、アメリカ全体、イギリス全体のことはいえないにいたしましても、性差が少なくて、非常に新しい家族が始まろうとしているということはいえると思います。

また、中国や韓国でも新しい世代を中心に、新しい生き方が始まっているようです。ただ欧米とか、他の社会と比べると、家族というものを子どもたちが、大事にして生きていこうという感じがよくわかったように思います。

そうした中で、正直いって日本にいる我々としては、日本の子どもたちの反応というのが、伝統的ではなく、かといって新しさにも欠ける、どちらかというと宙ぶらりんという感じで、これから先、日本の家族、親の姿がどちらに行くのかということが、ちょっと気にかかりました。以上が全体のまとめでございます。

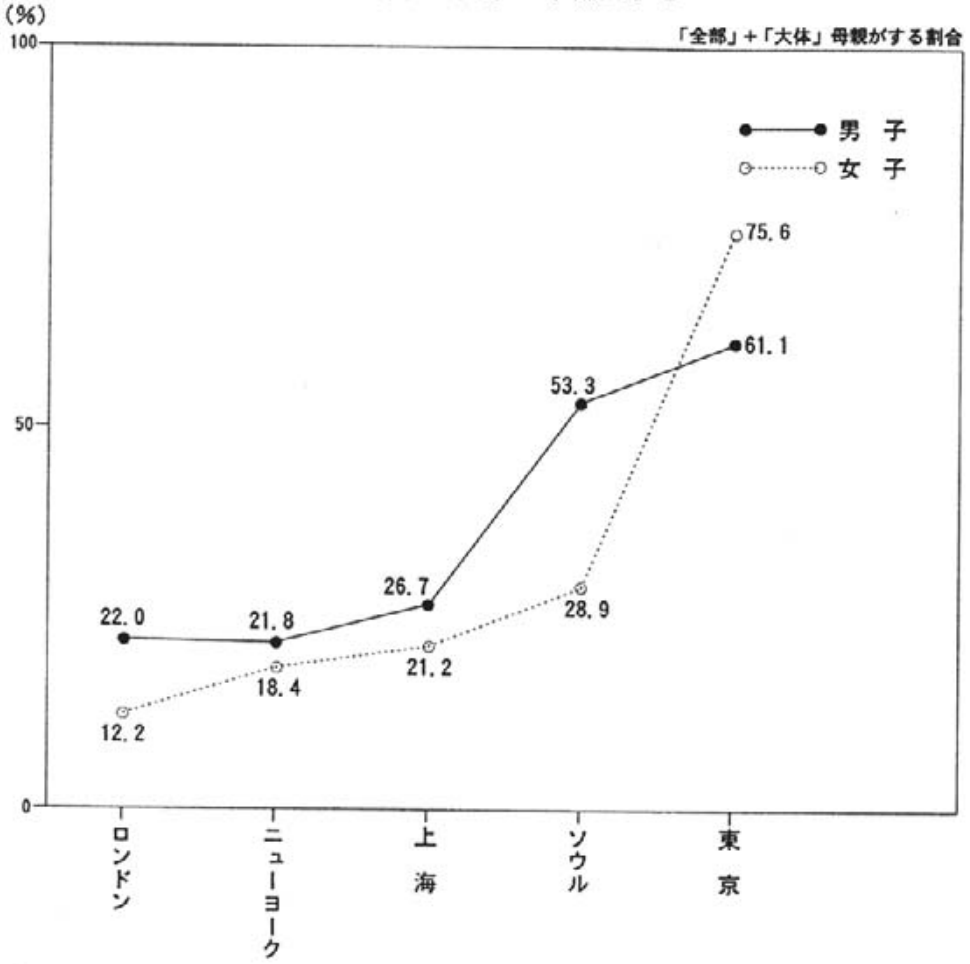



図9　母親が食事の準備をする